

---

# 姫さま、騎士と再会する

疋田 中

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姫さま、騎士と再会する

### 【Nコード】

N2682BA

### 【作者名】

疋田 中

### 【あらすじ】

あるところに、病弱なお姫さまとお姫さまに仕える騎士がおりました。体の弱いお姫さまは、たくさんが出来なかつたことを夢見ながら亡くなります。騎士は、大切な主の夢を叶えたいと思いながら、姫さまを見送ります。

このお話は、そんな二人が転生して出会って、夢を叶えていくお話になる予定。

## 二人の別れ（前書き）

登場人物が亡くなります。苦手な方はご注意ください。

## 二人の別れ

「……騎士さま」

か細い声と共に伸ばされたやせ細った腕を騎士の手が支える。

「姫……」

病の床に臥した主の負担にならないよう、騎士はそつと声をかけた。

「騎士さま、わたくしはもう長くありません……」

主は、目を閉じたままつぶやくように言う。認めたくない、否定したい。けれど、病弱な主の体が、もう病に絶えられないことは、ずっと側で守ってきた騎士が良く知っていた。主に嘘のつけない彼は、黙って首を横に振ることしかできない。

「……ごめんなさい。いつか、遠乗りに行きましょうと、言ったのに」

馬に乗って見に行きたいと願った花畑は、見ることができなかった。

自分で足を運んで菓子を選びたいと言っていた城下の菓子屋は、行くことができなかった。

ここ数年は、室内から出ることも稀になるくらい、彼女の体は弱っていた。

今はもう、起き上がることもできない。

「わたくし、次に目が覚めたら、きつとすっかり体が良くなっているの」

そうしたら、騎士さま。二人で遠くへ出かけましょう。木のぼりもしてみたいわ。夏の小川で水遊びをするのも、きつと楽しいでしょう。いろんなお店で食べ歩きをして、旅人に遠い国のお話してもらおうの。

姫さまは、小さくかすれた声で、たくさんの楽しいことを語る。  
「次に姫が目覚めたとき、私はきつとあなたの騎士として、あなたを守りましょう」

そうして、姫。あなたを連れて何処にでも出かけましょう。遠乗りに行く前に、乗馬の練習をしましょうね。小川も良いですけど、海もきつと気に入りますよ。歩きながら食べるのは、お行儀が悪いと侍女に叱られそうですね。遠い国の衣装も、姫ならきつと似合うでしょう。

騎士は、涙で頬を濡らしながら、姫さまに応える。

二人は、来ることのなかった楽しい未来を語る。

いくつものやりたかったこと、見たかったもの、行きたかった場所を挙げ続ける。

いつしか、姫さまの声が聞こえなくなつて。

気付かないふりをした騎士の声だけが、語り続ける。

姫さまは幸せそうに笑つて、それを聞いていた。

もう開かれることのない姫さまの目から、雫がそつと流れて落ちて。  
て。

やがて、騎士の声も嗚咽に紛れて消えていった。

## 二人の別れ（後書き）

一旦投稿したものの、設定を間違えていたため削除して投稿し直しました。  
すみません。

プロットなどなく、てれつと書いていきます。  
気がむいたときに続くので、お付き合い頂ける方はよろしくお願ひします。

## 姫さま、騎士と再会する

新品の幼稚園生の服に身を包んだ幼児が、ベージュのスーツに身を包んだ母親とビデオカメラを回す父親に手を引かれて歩いていった。仲の良い親子三人は、色とりどりのチューリップが咲く花壇の脇を通りぬける。足を踏み入れた小さな庭には、たくさんの遊具が並んでいた。カラフルな遊具には紙の飾りがつけられ、この目出度い日に相応しく華やかな空間を作り出している。

「入園おめでとうございます」

エプロンをつけた女性が、小さな胸に花飾りをつけた。ひまわり組と書かれた札も付いている。

花飾りのお礼を言うと、黄色い帽子を被った頭を撫でられる。この女性は「幼稚園の先生」だろう。恐らく、自分が所属するであろう「ひまわり組」を受け持つ人。愛想良く振舞っておいて損はない。(…いけない、これは幼児らしくない思考だ。)

腹のうちでそんなことを考えながら、表向きに見せるのは、下心など感じさせない満面の笑みだ。こんな風に笑うのは、手馴れている。

ただ、そんなことを悟らせて今生の父母を悲しませる気は無いから、今の自分は無邪気な幼児として振舞わなければならない。

「おとうさん、おかあさん、行ってくるね！」

父母の手を離し、自分と同じ黄色い帽子をかぶった集団に向けて駆けていく。傍から見ればひよこの集団のように見えるのだろうか、と思いつながら、割り当てられた席に着いた。

\* \*

入学式が終わった。

とても短い時間だったのは、じっとしてられない幼児に合わせ  
たものだったのだろう。それでも、親を探して泣き出す者や話に飽  
きて席を立つ者も見受けられた。

かつての自分が幼少の頃はとうであつたらうか。これほどに手の  
掛かる幼児ではなかったと思う。

「ひめ！！」

そう、かつての自分はお城のお姫様だったのだから。式典など日  
常茶飯事。

「ひめ、ようやくお会いできました！」

まあ、体が弱くてほとんどでられなかったのだが。

そこまで考えて、ふと意識を現実に戻す。

目の前には、黄色い帽子を被ったちびっこが一人。妙にキラキラ  
とした瞳で、自分を見上げている。

そう、見上げている。跪いて。

かつて、兄妹のように共にあつた騎士が忠誠を誓う、あのポーズ  
で。ああ、この男も生まれ変わったのか。前世の記憶を持ったまま  
再び会えたことは、素直に嬉しく思う。

「ひめ、きつとお会いできると、信じておりましたっ！」

目を潤ませて、感激しているのだろう。感情がもろに表に出る。  
これは、そういう男だった。

だが、時と場所を考えると言つてやりたい。周囲から向けられる  
好奇の目が、わからないのか。

「ひめ、私をあなたの騎士にしてください。どんなことから、き  
つと守ってみせます！」

小さな手が、自分の同じく小さな手をとる。ああ、懐かしい。前  
世で騎士の誓いを受けたときの、このポーズ。自分の最後に聞いた、  
その言葉。

しかし、今世の騎士の親は、どんな思い出彼を育てたのだろうか。  
自分の子どもがこんなのだつたら、ちょっと、いや、かなり嫌だ。

「私に、今世の名をお教え下さい。騎士の誓いをさせてください、

ひめっ」

かつての主に再会して、興奮しているのだろう。紅潮している少年のほっぺたを掴んで左右に引っ張り、言ってやった。

「おれは、男だっ！ひめじゃなーーーーい！！！」

これは、かつて病弱だった姫さまとその騎士の、ハッピーエンドへのはじまり。のはず。

姫さま、騎士と再会する（後書き）

のりと勢いだけで書いています。

\* B L にはなりません。

## 姫さま、わんぱくに育つ

寒風吹き付ける中、膝小僧をむき出しにした短パン姿の少年が木の上に立っている。

(こんな格好で外に出たら、ぜったい熱出してたよなあ)

二階建ての建物くらいの高さにある木の枝に仁王立ちして、少年は感慨深く思う。今回の体はずいぶんと丈夫にできているらしい。ありがたいことだ。

前世で叶わなかった木のぼりをするという夢がかなって、少年はご機嫌だ。冷たい空気を胸いっぱい吸い込んで、ぐんとのびをする。

「お前も早く来いよ。気持ちいいぞ！」

声をかけた先には、元騎士がいた。

顔を青くして地上でおろおろと歩き回っている。

「姫、危ないですよ！早く降りてきてください！！いや、危ないですから、ゆっくり、ゆっくりでいいから、降りてきてくださいっ」

前世では無茶なことなどする体力もなかったため、この騎士の慌てる姿など見たことがない。基本的に人の良い笑顔を浮かべている騎士ばかりが記憶にある。それ以外の表情といえば、熱を出した自分を心配して困ったように笑う顔くらいか。

(いや、俺が死ぬときには、泣き顔も見たな……)

そんなことを思い出して、少しばかり胸が痛む元姫さまは、現在小学3年生。前世でできなかったあれやこれやを行うため、日々活動的に過ごしている。そのため、膝小僧の絆創膏は、もはやトレードマークとなりつつある。

ちなみに、元姫さまに絆創膏を貼るのは、元騎士の役目になっていた。

(泣かれても、楽しくないしな)

心配のあまり泣き出しかねない顔でこちらを見上げる元騎士を見て、仕方ないな、と木から降りる。

ひよいひよいと降りていって、のこりメートルに差し掛かったところで、油断した。

ずる、と片手がすべり、やばっと思った時には、浮遊感。

次の瞬間には衝撃を感じていた。

が、地面にしては柔らかい。覚悟したほどの痛みもない。

「姫、お怪我は!？」

体の下から聞こえた、元騎士の声。

慌てて飛び退いて、彼の手をとって起こす。こちらの心配ばかりしている元騎士に適当に返事をして、彼の服についた土をぱたぱたと叩く。同時に怪我がないかを確認すると、手のひらがすりむけていた。

「絆創膏くれ」

「姫、どこにお怪我をされたのですか!」

手のひらを彼に向けて絆創膏を要求すれば、顔色をさっと青ざめさせて、聞いてくる。

人のことばかり心配する元騎士にいらだち、勝手に彼のズボンから絆創膏を取り出して彼の手をつかむ。急にズボンに手を突っ込まれて驚いた彼が飛び退くのも構わず、つかんだ手を引き寄せた。

「怪我したのはお前。おとなしくしろ」

そんな恐れ多い、私などのことはお構いなく、などとわめく元騎士を無視して絆創膏を貼る。貼り終えたその手で彼の頬をつかみ、左右に引き伸ばしてやった。

「にゃ、にゃにをなさりゆのれすか、ひめ」

元騎士の言葉を聞き流しながら、頬を伸ばして遊ぶ。ひとしきり遊んでから、最後に伸ばせるだけ伸ばして手を離す。

「何で庇った」

「姫をお守りするのが、私の使命です」

問えば、即答された。予想通りの答えに、元姫さまは苦い顔をす

る。

「俺はもう姫じゃない。お前に守られる存在じゃないんだ」

「それでも、私にとって仕えるべき人。守るべき人は、あなたです」  
迷いなく、まっすぐに見つめてくる瞳は、たしかに前世の騎士と  
変わらない光を宿していた。わかっている。こいつは、そういう男  
だ。

それでも、ため息が出てしまう。だって、自分は。

「俺は、お前と一緒に遊びたいんだ」

ため息まじりにそう告げれば、元騎士はぽかんとした顔をしてい  
る。

「言っただろう。一緒に遊ぼうって。木のぼりしたい、川遊びした  
い、買い食いもしようって、言っただろう」

忘れてしまったのか、と問えば、驚いた顔のまま元騎士は首を横  
に振る。

「俺は、お前を従えて遊びたいって言ったんじゃない。お前と一緒  
に遊びたいって言ったんだ」

そう言えば、元騎士は感激に頬を染めた。その顔に機嫌を良くし  
た元姫さまは、一番言いたかったことを伝える。

「俺は、お前と友達になりたかったんだ」

前世から、ずっと伝えたかった言葉。かつては身分のために伝え  
られなかった言葉。今ならば、こんなに簡単に言える。だから、仕  
えるなんて、守るべき人なんて言っただけ、俺を遠ざけないで。

それを聞いた元騎士は、喜びのあまり泣き出した。涙でべちゃべ  
ちゃになった顔はとも間抜けだったが、あの、最後に見た苦しそ  
うな泣き顔とは大違いで。

（こんな泣き顔も、できるんだなあ）

元姫さまはあきれ笑いながらも、元騎士が泣き止むまでその顔  
を眺めていた。

姫さま、わんぱくに育つ（後書き）

元騎士、ちびっこのときは結構泣き虫です。

元姫さまは、郷に入っては郷に従うタイプなので、少年らしく振舞っています。

少々、やんちゃが過ぎるようですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2682ba/>

---

姫さま、騎士と再会する

2012年1月6日22時50分発行